

平成23年度 男女共同参画推進月間講演会

女と男のおひとりさま道 「金持ち・家族持ち」から「人持ち」へ



日時 平成23年6月18日(土) 13:30～15:30
会場 こうち男女共同参画センター 3階大会議室

講師 上野千鶴子

(社会学者、NPO 法人ウィメンズアクションネットワーク(WAN)理事長)

1948年富山県生まれ。京都大学大学院社会学博士課程修了、平安女学院短期大学助教授、シカゴ大学人類学部客員研究員、京都精華大学助教授、国際日本文化研究センター客員助教授、ボン大学客員教授、コロンビア大学客員教授、メキシコ大学院大学客員教授等を経る。1993年東京大学文学部助教授(社会学)、1995年東京大学大学院人文社会系研究科教授。

専門は女性学、ジェンダー研究。この分野のパイオニアであり、指導的な理論家のひとり。近年は高齢者の介護問題に関わっている。

1994年『近代家族の成立と終焉』(岩波書店)でサントリー学芸賞を受賞。『上野千鶴子が文学を社会学にする』(朝日新聞社)、『差異の政治学』『当事者主権』(中西正司と共著)(岩波書店)、『家族を容れるハコ 家族を超えるハコ』(平凡社)、『老いる準備』(学陽書房)など著書多数。『岩波シリーズ ケア その思想と実践』全6巻(岩波書店)『増補新版 日本のフェミニズム』全12巻(岩波書店)の共著者、近著に中西正司と共編の『ニーズ中心の福祉社会へ：当事者主権の次世代福祉戦略』(医学書院)、辻元清美との共著『世代間連帯』(岩波新書)。『おひとりさまの老後』『男おひとりさま道』(法研)はベストセラーに。新刊にエッセイ集『ひとりの午後』(NHK出版)、『女ぎらい』(紀伊国屋書店)。



★ “おひとりさま”の時代がやってきた

長生きすれば人はいずれ“おひとりさま”になります。女性の有配偶率のピークは40代後半。それまでに死別・離別した女性はそれから先、二度と結婚しない傾向があります。そして年齢が上がれば、死別率が急速に上がります。80歳を過ぎれば、男も女もほぼ“おひとりさま”と考えてください。人が80歳を超す確率は、女性の4人に

3人、男性の2人に1人です。しかも、現在30代の男性は3人に1人、女性は5人に1人が生涯非婚者になると人口学的に予測されています。“おひとりさま”の時代がやってきました。

実は“おひとりさま”の老後は問題だらけです。まず“女おひとりさま”は貧乏です。貧困率が50%を超えています。生活保護受給率が高く、無年金、低年金の方も多いです。“男おひとりさま”は、貧困率は半分になりますが、孤立しています。どうしてこうなったかという、昔のお年寄り、子どもがいたら同居して子どもの家計に依存し、別居していたら子どもからの仕送りに依存し、子ども頼みで老後を暮らしてきました。しかし、今のお年寄りは子ども頼みの老後を念頭に生きてきたのにもかかわらず、子どもは少ししか産んでない。あるいは子ども自身が年をとり年金生活に入ってしまった。子どもに先立たれることも多くなりました。セーフティネットがなくなってきたのです。そうならば、この世の中を作り替えたらい。つまり、家族頼みからそれに替わる代替ネットワークがあればいいのではないかと考えました。

★ “家族持ち” から “人持ち” へ

考えてみてください。“家族持ち”から家族を引き算したら何が残るか。何も残らない人のことを“人持ち”とは言いません。“おひとりさま”は“家族持ち”ではありません。だから不安です。ですから、“おひとりさま”は“人持ち”になるように努力をしてくれています。いざというときの時のために家の鍵を預けて、例えば入院セットを病院に持ってきてくれる友だち、電話1本で買い物の代わりにやってくれる友だちをつくっています。“家族持ち”の方がかえてそういうセーフティネットをつくっていないことがある。では、家族がなくても、お金さえあればいいのでしょうか。人間関係はお金では買えません。どんなに仕事が好きでも、いつか明日からこの職場に来なくていいと言われるときが必ず来る。家族の時間も必ず終わります。親業にも定年があります。それに配偶者が亡くなったからってまさか後追い自殺なんかしないですよ。配偶者に死に別れ、子どもは遠くに行き、最後に自分の周りに残るのは誰かという、一緒に人生を過ごしてきた仲間たち、そういう関係が残ります。

無縁という言葉があります。無縁とはたんに「縁がない」ということを意味しません。それどころか、地縁・血縁を離れて仏縁のもとに集う、選び合う新しい“縁”を仏教用語で無縁と呼んだ。同じように、脱血縁・脱地縁・脱社縁の新しい人間のつながりのことを“選択縁”と名づけましょうと私は提案しました。どうして“選択縁”と呼ぶかというと、米びつの中身までみんな分かっている抜け出せないようなプライバシーのない関係ではなく、加入・脱退が自由で強制力がなく、まるごとのコミットメント(=関わり合い)を要求しない、そういう選び合う“縁”が人を最期に支え合うからです。そういう自分の意思や志やフィーリングで選び合った仲間たちがいる人のことを“人持ち”と呼びます。

★“おひとりさま”の在宅一人死は可能か

介護施設入所の待機高齢者は全国で42万人といわれています。私は「もっと施設をつくって待機高齢者をゼロにしよう」というのはやめてほしいと思います。なぜかという、施設に入れて安心したいと思うのは家族の方であり、お年寄り決してそう思っていないからです。追い詰められた家族の最後の選択肢が「悪いが家から出てってくれんか」という選択肢でした。私は家族を責めるつもりはありません。それだけ介護の負担が大変だというのは分かります。では、お年寄りは家族と一緒に暮らしたいか、家族といるのが幸せか。遠くにいる家族に呼び寄せられて、住みなれた土地を離れるのが幸せか。高齢者の幸福度調査では、呼び寄せ同居の幸福度が低いことが分かっています。

私の一番新しい研究テーマは「おひとりさまの在宅ひとり死は可能か」看取り手のいない単身高齢者が家で他人に支えられて一人で死んでいくことはできるか。答えはイエスです。「24時間巡回訪問介護」「24時間対応の訪問医療」「24時間対応の訪問看護」の3点セットがあれば、“おひとりさま”でも在宅で死んでいける。そのためには、それを支える人たちのネットワークが要ります。従来の「ケアマネジメント」に介護と医療を付け加えたものが「トータルヘルスマネジメント」、私はそれにその人の暮らし、お金、家族関係、葬式、死後までを含めて、その人の生き死にかかわる「トータルライフマネジメント」が必要だと思いました。その中には、弁護士や税理士、民生委員、葬儀の業者、場合によっては宗教家、親しい友だちや家族も入れる。「トータルライフマネジメント」の肝は何かというと、全員で情報を共有すること。情報を共有すると、情報の公開性と透明性が高まり、専門家同士の相互監視が起きる。本人を中心に置き、専門家がチームを組み、多職種提携でお互いに情報を共有し、相互監視をして、本人にとって一番いいことを選ぶ。こういう仕組みをこれからつくっていくことがとても大事になると思います。

★誰もが安心して弱者になれる社会

超高齢社会は誰もがいつかは必ず弱者になる社会だと考えれば、私たちがこれからつくる必要があるのは「弱者になるまい、弱者になる前にぼっくり死のう」という社会ではなく「いつ弱者になっても安心できる、誰もが安心して弱者になれる」社会ではないでしょうか。例えば遠くにいる子どもが、親の介護のために仕事を辞めて郷里に帰らなければいけないだろうかと悩む、あるいは仕事を辞められないから、親に郷里を離れて都会に来てもらおうかと呼び寄せを考える。そういうときに、自分の家で老い衰えながら他人に支えられて、そしてその場を看取りの場に換えていく仕組みがあれば、この一言が言えます「おまえの気持ちはうれしいけれども、私はこの場で老いて死んでいくよ。なぜならば、この地域には私を支えてくれる人がいるから」そう言えたらどんなに安心でしょうね。